

モード Mode は語る

中野 香織

手仕事と新技術の融合

6月24日から27日、パリでオートクチュール・ウィーク2024—2025年秋冬コレクションが開かれる。プレタポルテ（既製服）と一緒に「パリコレ」と総称されがちだが、歴然と異なる。運営に詳しいブラッドリー・ダン・クラークス氏に聞いた。

「オートクチュールという名称はフランス政府が法的に保護しているブランド名。厳しい要件があり、フルメンバー、準メンバー、ゲストメンバーの3種類それぞれに特定の基準がある。特に手作業の量や時間が大きな違いだ」とクラークス氏は語



2023—2024年秋冬の中里唯馬氏の作品—Photograph by Andrea Heinsohn for DesignArtMagazine.com

る。15分のランウェイで最低25ルックを見せ、少なくとも15人のスタッフが手作業で制作する。

パリ・オートクチュール

単価が高いオートクチュールは、富裕層増加を背景に市場拡大を続ける。世界中からメンバー希望者が押し寄せるが、オートクチュール組合（通称サンディカ）の選抜プロセスがある。既存メンバーの推薦状のほか、コレクションの実績や影響力の証明など多くの基準をクリアしなくてはならない。厳格で公正な審査が高価格を支え、品質保証につながる。

日本から唯一参加するのは中里唯馬氏。森英恵氏に次ぐ2人目の日本人デザイナーだ。ゲストメンバーだがさらに実績を積み準メンバーを目

指す。中里氏にオートクチュールの意義とは何なのかを質問した。

「手作業と職人技、個性を尊重することは、大量生産への対抗。オートクチュールは社会課題解決のための新技術の研究と実験の場にもなっており、現代美術のような存在になりつつある」と中里氏は語る。

一方、クラークス氏は、手仕事とテクノロジーを融合させて新しい美を生み出している現状を、「第4次産業革命」と呼び、デザイナーの創造性を支援することが人類の前進を助ける、と語る。オートクチュールは、将来の車の技術を先取りするF1のような存在なのだ。人間のアイデアと手仕事を新技術で開花させる挑戦と祝祭という意味を帯びる。